



Vol.5 前向きに再出発します。

結婚、出産、子育てと、ひと通り女の一生を歩んでいた私が、訳あって離婚を決意しました。予想だにしない展開に私自身が一番びっくりですからそんなに驚かないで下さい。それなりの覚悟があつてリスクを伴う選択肢を選んだのですから...

でも、10人中、10人の友人たちが「頑張れー」とエールを送ってくれています。現状を維持していれば、平穩無事な毎日を通り越せるのでしょうか。築きあげてきたものを壊すのは相当な覚悟を必要としました。守られてきた生活が一変するのですから。でもそれが次の世界への下敷きとなり、失ったものが心のこやしになるのではと信じていきます。

身を持って体験したことをいつかアドバイスできたら... 離婚を決意した時、ネットでの関連サイトを覗いてみま

文=RURIKO 1953年生まれ。もうひとつ花咲かしたいアラ還(熟女って言うてエ〜)。生涯現役を目指し、某ローカル紙記者として活躍(?)中。趣味は、映画鑑賞、散歩、写真用器、生き方は超不器用人間。弱者の声に耳を澄ますヒトでいたい。エッセイで元気を発信したい。自分へのメッセージでもあ

した。実に多くの世代の男女が、同じような問題で揺れていることを知り驚くと同時に勇気づけられました。

いつしか時間が流れ、落ち着いたら、同じような問題で悩める人に、ほんの少しでも私の経験がお役に立てるかも知れない...と事態を冷静に見つめるもうひとりの私がいいます。

以前読んだリリー・フランキーの「東京タワー」の一節が蘇ります。

「自分の予想でできる未来の分量と過去の分量。その未来にかけられる人種と、ひきずって来た過去を重視する人種。選択次第で明らかに違う時間と違う考えが生まれるという」

「進むべきか」とどまる「ベさか」という事でしょうか。いづからか生活の安定を求め、心をつたをしてきた気がします。

ひとつの決断は、周囲に様々な影響を及ぼす事は百も承知ですが、残された人生をそろそろ肩の荷を降ろしたいと考えています。これからは、大変な事を想像するより、ふつてわいた時間を目的を持ち有意義に過ごしたいと考えています。

背中を押してくれた友人の声がありました。「いま、貴女は、普通の人が味わえない貴重な体験をしているのよ。だったら楽しみなさい。これも人生勉強」と。頼もしいひと言にヨッシャーです。

空想80%のショートストーリー 透明な原稿用紙

No.5 ウキウキ感&ウツウツ感

久しぶりにEPOの「DOWN TOWN」を聴いてしまった。この曲の持つウキウキ感にいてもたってもいられなくなり、愛車での夜の街へと飛び出した。というのほもちろん嘘。「DOWNTOWN」はシユガーベイブの名盤「SONGS」に収録されていて、EPOのはカバー。「SONGS」は確か20歳前後に買った。

えっと。4行目の「ウキウキ感」とはどんな感じなのか? ちよつと例を挙げたいと思う。

□海まで一直線に続く片道2車線の国道が、あたかも滑走路のように思えてくる感じ。 □12月下旬の夜空から、1億の天使がクラゲのバラシートで降りてくるような感じ。 □スカートリンクで円を描き滑る女の子の首に巻いたクリーム色のマフラーの先端みたいな感じ。

□スカートリンクで円を描き滑る女の子の首に巻いたクリーム色のマフラーの先端みたいな感じ。



講談社 ¥1,680

「新参者」 東野圭吾

東野圭吾待望の新作は、「容疑者Xの献身」湯川教授と並び称される東野文学の2大キャラクター、加賀刑事が活躍するお話。

日本橋署に赴任した「新参者」の加賀。マンションで一人暮らしの女性が絞殺遺体で発見され、捜査に乗り出す。加賀は、まだよく知らぬ日本橋の街を歩きながら、事件解決の糸口を探る。

その平易だが味のある語り口、事件の関係者と加賀のやりとりを事件関係者の視点で、それぞれにリンクさせながら章立てて形作っていく構成、それぞれのエピソードにおける謎と解答、ラストに現れる「真相」という一枚絵、やはり東野圭吾はすこかった。

加賀という特別派手な訳ではないのに、人間的魅力にあふれたキャラクターを際だたせているのは、やはり物語の視点を「加賀自身」ではなく「加賀と出会い、接する者」にしているからだろう。読者は、事件の捜査に関わる様々な人物の目と耳を借りて、加賀刑事と対話する。当然、加賀の心の中をうかがい知ることはできないが、彼がどう行動し、それがどんな結果をもたらしたかを知る。その手法が、謎解きの面白さと合わせて、「人間・加賀」の魅力を増幅させていると考える。

東野ミステリーの深い味わいと加賀という魅力的なキャラクターの相乗効果。それが本書を間違いなく傑作たらしめている。(九十九十一)

(毎日歩いていると、気付くのです。絶えず隣を歩く「のっぺらぼう」の存在に。そいつが襲いかかってきたときは、防空壕で頭を抱えて爆音が止むのを待ちます。そこには、ウキウキ感もクソもないのです)。

なんとなく撮った写真に、偶然、1億の天使が写ってたら。プリントして財布の中に入れておこうと。 日曜の妄想は、これでおしまい。

物づくりを続ける上で、一つ大切なことは、作り手自身が何かを作り上げると言う行為を楽しむことだと思ふ。つらい、苦しいと思えば、それは必ず作品に現れる。心を込めるには、まずその「心」が豊かであればならない。(直)

進化するニュースレター 東毛見聞録 (ほぼ月刊) ゼロトップ通信 編集長: 香山直 ライター: 赤碁堂鹿男 RURIKO メランコリカ 九十九一 四方美人 えどがわはるみ 藤原 和木 隆 編集・制作・発行: ゼロトップデザインワークス 〒373-0013 群馬県太田市市場町457-3 TEL.050-7525-6023 FAX.0284-71-4157 e-mail: nao@zero-top.com web: http://www.zero-top.com

ロスタイム 今号では「焼そば屋さん」と「印鑑屋さん」という異なる業種のお店をご紹介します。早く取材に当たっていただいで感謝の気持ちでいっぱい。あれやこれやと工夫をして、自分の手で一つの作品を作り上げる。物づくりの醍醐味がそこにはある。焼そばも印鑑も、その点は同じ。物づくりの先にあるのは、やはり「お客さんに喜んでもらいたい」という純粹な気持ちだ。